

現代短歌大系 7

塚本邦雄
岡井 隆
葛原妙子

責任編集

大岡 信・塚本邦雄・中井英夫

現代短歌大系 7

塚本邦雄
岡井 隆
葛原妙子

三書房

現代短歌大系 第七卷

(全十二卷)

一九七二年十月三十一日 第一版第一刷発行
一九七二年十一月三十日 第一版第二刷発行

編者 大岡 信
塚本 邦雄

中井 英夫
©一九七二年

発行者 田川 敬吾
株式会社 三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九
電話〇三(二九九)三三三番
振替東京 八四一六〇番

印刷所 第一印刷株式会社
製本所 株式会社鈴木製本所

現代短歌大系

第7卷 目次

塚本邦雄
〰〰〰
003

岡井 隆
〰〰〰
125

葛原妙子
〰〰〰
231

解説 上田三四一
〰〰〰
335

解説 上田三四二

編集協力 齋藤 慎爾

篠 弘

正津 勉

富士田元彦

装幀 澁川 育由

塚本邦雄



塚本邦雄 略歴

大正11年9月、滋賀県に生れる。昭和24年、杉原一司らと同人誌「メトード」を創刊、七号にて杉原の死と共に終刊。26年、彼の霊に献呈した処女歌集『水葬物語』をもって出発。31年『裝飾樂句』。33年『日本人靈歌』。36年『水銀傳説』。40年『綠色研究』。44年『感幻樂』。45年『塚本邦雄歌集』。歌集以外の著書『悅樂園丁辭典』、『夕暮の諧調』、『紺青のわかれ』、『ハムレット』他。

塚本邦雄

目次

綠色研究

(完本)

007

抄

055

水葬物語

裝飾樂句

日本人靈歌

水銀傳說

感 幻 樂

作家論

田村隆一

111

綠色研究 (完本)

目次

革命遠近法	10
黃昏遠近法	10
味爽遠近法	11
果實埋葬	13
快速調	13
緩徐調	14
綠色研究 a study in green	16
綠青篇	16
白綠篇	18
幼帝	20
新綠變	20
神はわが櫓	22
月蝕對位法	23
血紅旋律	23
漆黑旋律	25
不定冠詞	26

快癒と瀕死	三六
死神と悦樂	三六
新・殘酷物語	三〇
薔薇幽閉	三〇
夏と煙	三二
致死量 超絶技巧練習曲11	三三
絶唱	三三
青年科	三五
縦 半音階的ワグネル論あるひは〈über das Weiblichen im Menschlichen〉	三六
魔圈	三七
半神	三九
夏至物語 or a study in indigo	四三
咒	四三
祝	四四
反神論	四六
反世界	四六
青鬚	四六
跋	五一

革命遠近法

黄昏遠近法

雉食へばましてしのばゆ^{*}再た娶りあかあかと冬も半裸のピカソ

斷食の睡眠^{ねむり}ただよふばかりなるわれ越えて緋のコザック騎兵

露煮つめたましひの贅^{えい}つくる妻、婚姻ののち千一夜^へ経つ

サン・セバスチャン繪の中にひたすらに水欲り水の上ゆく椿

交響詩ハ四季V飢ゑにそなへて白人を鹽漬にするフィジー土人に

鷺鳥卵つめたしガルガンチュアの母生みしバイヨ國の五月雨

梅雨明けてまづ近景に母國よりのがるる聲赤きほととぎす

馬は睡りて亡命希ふことなきか夏さりわがたましひ滂沱^{とうた}たり

われらからだのみ娶り夜の曲馬團^{シムル}には象かなしみに充ちてあゆむ

夜のはてを君が代ひびき禽籠に鶉の嘴のほのかに合へり

われ英雄と成らざりしかば老母は粥と占星術に溺れき

鼠滅ぼしわが家寺院のにはひする數日ののち鐵色の夏

夏至のひかり胸にながれて青年のたとふれば錫のごとき獨身

革命來ることなし町は旱天にならべてさかさまに賣る筈

風太郎おごそかに鹽かつぎ去り蝸のその日ぐらしのこころ

*

味爽遠近法

アヴェ・マリア、人妻まりあ 八月の電柱人のにはひに灼けて

孔子に隨ふ處女ありしや 心冷え牛乳を晩夏の水もて淡む

憂國にあへてかかはらざる彼らジン飲むと野火のごとき火放ち

箒賣りにもとめし笞の一條のみどり 婚姻寸前の幸

體育館まひる吊輪の二つの眼^し盲ひて絢爛たる不在あり

採油塔の脚しなやかにむらがるバクーとぞ死後の蜜月の町

砂男……されば父たる男らの夜夜還るタクラマカン砂漠

まづしくて買ふ小罐のカナリアの餌の稗ラマルティース印を

渴きつつ日日吟むイベリアの牧歌　　△目^{オホス}△と△針^ト金雀枝^{ホス}△韻踏む

△青騎士△のそのかみクレール沈鬱に鞍下肉の霜ふれる層

坐して針賣る老婆ここより西方へ千里タシケントは麵麴の町

ギムナジウムと花屋のあはひ泥濘の屬領も味爽^{よあけ}までに亡ぶ

金礦貨車かたへ過ぎつつ　　喫泉に口づくるわれはかりそめの死者

ひざまづき堪ふるレスラーいま汝^{なれ}が獅子身中の羽蟻の娶り

亡命といへばわれらのたましひに石油満ちくるごときはつなつ

印象派以後、數學的に正確な遠近法は、全くその根據と意義を失つたかに見えるが、それならば果して、これに替はるべき新しい遠近法を、ぼくたちは有つにいたつただらうか。考幻學的畫布の遠なる過去、近なる未來のペースベクティヴの深みに、自己と世界の連繋と葛藤を描かうとする時、かかる懷疑は殊に切實であり、一連においては、却つて中世の逆遠近法に學ぶところが多かつた。亡命とはその遠・近の中間に、さかさまに吊される、現代の思想である。

果實埋葬

快速調

揚雲雀そのかみ支那に耳斬りの刑ありてこの群青の午^{ひる}

汝姦淫せよ 柔道着縛したる煤色の帶、樺色のおび

暴動鹽のごとくあたらし剛毛のツエツツエ 蠅棲む國の處女に^{むとめ}

乾葡萄の陽の味ふくみつつ視入るレスリングひめやかに喘げり

黒人オルフェ ころの夏に百人の競走^{レース}の自轉車の腎熱^{あつ}し

まづ脛より青年となる少年の眞夏、流水算ひややかに

耳鼻咽喉科醫院の窓に龜甲の網覆ふ 何處より來りしものぞ

馬と男をのみ信じつつ潜然さんぜんと今日水のうへ行く夏まつり

涅槃交響樂の鐘樂カリンすれちがふときわれに耳ふれし輓馬に

煽風器もてかわかす赤き雨沓の底ゆきづまりつつみごもれり

粥も沐浴ゆあみも熱きを愛し七月のきみはわがわれはきみの刺客

婚姻のいま世界には數知れぬ魔のゆふぐれを葱刈る農夫

稀なる奸智欲りつつわれは歩みゐき樽のタールに降りくる鷺毛

われより死うばへる醫師よ浴槽に脚を岬のごとく竝べつ

いくさ始まる前千年の夏のごと芳しも坂に蝮賣る店

*